

慎重な検討が望ましい。すなわち単に目立った存在（分布）や花粉量の多寡などの面のみから、植物学領域の研究者が、この仲間の Hayfever plant としての是否を論ずることは、彼地の関係者諸氏の言のように危険と言わざるを得ない。

あくまでも医学領域、特に耳鼻咽喉科学（鼻アレルギー疾患）関係者による本疾病に関する詳細な臨床医学的検討が行われ、我国自体での罹患者の実態が明らかにされることが先決と思われる。

因みに、太平洋洲のフロラに詳しいハワイ大学の St. John 博士によれば、北米合衆国の中でも最も日本に近いハワイ諸島には、本属の植物は自生しないが、しかし Tall Golden-rod の名で呼ばれ、我国でもなじみ深い *Solidago altissima* L. 一種のみが栽培あるいは逸出帰化している由である。

なお、その最初の記録は 1926 年であるとのことで、これは本種の我国への渡来時期 (Ornamental plant としての) と相通じ興味深い。

終りに、筆者の外来の *Solidago* 属植物の調査に際し、長年にわたり種々と御教示ならびに御援助いただいた東邦大学名誉教授久内清孝先生、東京大学名誉教授原寛博士を始めとする関係者各位、及び筆者の欧米における諸調査に当り、御助力下さったニューヨーク植物園主任研究官兼ニューヨーク市立大学教授小山鐵夫博士、ハワイ大学名誉教授 St. John 博士、また花粉症に関し臨床家の立場から有益な示唆を与えられた東京医科歯科大学耳鼻咽喉科学教室助教授斎藤洋三博士に対し厚く御礼申上げたい。

(東京歯科大学)

○ツツジ類の自然交配種 (山崎 敬) Takasi YAMAZAKI: New natural hybrids of *Rhododendron* (§ Tsutsutsi) in Japan

日本にはツツジ類の多くの野生種があり、それらの間では交配しやすく、自然の中にも、人工的にもいくつかの交配種が知られている。人工交配のものは、いくつかの種類の交配が繰返されたりしているので、その起源をもとめることの困難なものが多いが、自然交配のものは、自生地附近の野生種と比較して、その両親を推定することが可能である。

自然交配種としての現在知られているものは、サツキとヤマツツジの交配種と思われるハンノウツツジ (*R. hanoense* Nakai), モチツツジとヤマツツジの交配種ミヤコツツジ (*R. tectum* Koidz.), モチツツジとキシツツジの交配種ムラサキリュウキュウツツジ (*R. hortense* Nakai) がある。最近つづじ栽培が盛んになるにつれ、いくつかの自然交配種が発見され、愛好家の間に広まりつつあるので、混乱の起らないうちに整理し記録しておきたいと思う。

宇連ツツジ 三河の低山地はツツジ類の変化の多い所で、ヤマツツジの一型である三河ツツジには、花色や花型がさまざまに変化したものが見られるし、ミヤコツツジ

もしばしば見出される。十数年前、東京の榎本一郎氏が鳳来寺山の裏にある宇連川の川岸で採集したものは、宇連ツツジの名で一部の愛好家の間に広まっている。葉は小さく、若枝に褐毛が密生し、花期は遅く5月末から6月初めで、薬が暗紫色であるなどサツキを思わせるが、花が大きくがく片が大きく腺毛が密生し、花柄に立毛があるなどは、附近に野生するモチツツジの性質である。モチツツジとサツキの交配したものと考えられる。花は明るい紅紫色で美しく、よく枝分れし、葉も小形で園芸価値のある植物である。

原地は色々なツツジ類の変化品やエンシュウシャクナゲの見られる場所であったがダムの建設で現在は水没している。

鳳来ツツジ 十数年前、榎本一郎氏が宇連川で採集したものである。全体はミヤコツツジによく似ているが、雄しべは5本でなく常に7~8本である点異なる。モチツツジとヤマツツジ系の交配と思えるが、オオヤマツツジの性質が加わっているものと考える。ミヤコツツジの単に雄しべの数が多くなった個体と見てもさしつかえなく、この点は今後の研究を必要とするので、正式な命名、記載はひかえておく。小松氏のサンヨウツツジの大和産のものもこれに関係すると考えられる。中部地方南部から近畿にかけてときに見られる。宇連の個体は花が濃紅紫色で見事であるが、ウレンツツジに較べると枝は粗大で葉も大きいので、園芸的にはやや劣るようである。

山陽ツツジ 古く小松春三氏によって報告されたものである。後にヤマツツジの変種とされたり、ミヤコツツジの変種とされたりしている。小松氏は大和と周防の産地をあげている。東京大学にある標本では周防のものにだけ *R. Kaempferi* Pl. var *purpureum* Nakai var. nov. と *R. purpureum* Komatsu とが書かれ、大和の標本にはこうした書き込みはない。中井猛之進氏が周防で発見し、新変種として標本上に記していたものを、小松氏が新種として発表されたことがわかる。小松氏はがく片が細長いことと、雄しべが6~7本であることを特徴として1918年に発表したが、中井氏は1919年に5本の雄しべをもつ、がく片の細長いヤマツツジの品種として発表し、同氏の大日本樹木誌にも雄しべ5本で図示している。しかし原標本の周防のものは、花がこわれているが、そのうちの1個は明らかに7本の雄しべをもつ。大和のものも6~7本の雄しべをもつ。したがって小松氏の報告が正しく、大日本樹木誌の図は、もし生品から画いたとすれば明らかに別の物である。

小松氏も中井氏も記録しなかったが、サンヨウツツジのがく片には腺毛が散生する。したがって原寛氏が、サンヨウツツジはヤマツツジの仲間でなく、ミヤコツツジの類であるとしたのは当をえたあつかいであり、モチツツジ系の種類とヤマツツジ系の種類との交配種と思われる。これに類するものは愛媛県の久万町や和歌山県と大阪府の境の葛城山でも採集されている。山口県と愛媛県のものは枝がやや細く花は小形であり、近畿のものは枝がやや太く花は大形であり、系統が異なるようである。

中国地方西部や四国西部にはモチツツジは分布せずキシツツジの領域であり、近畿地方はモチツツジの領域である。したがって本来のサンヨウツツジはキシツツジとヤマツツジとの交配種と思われ、近畿のものはモチツツジとヤマツツジ系の種類との交配種で、ホウライツツジ型のもののように思われる。キシツツジとモチツツジとは非常に近縁で、雄しべの数以外の区別点の特徴は微妙であるように、ヤマツツジの性質も混ったホウライツツジとサンヨウツツジとの区別はさらに微妙である。

Rhododendron × Enomotoi Yamazaki hybr. nov.

R. macrosepalum Maxim. × *R. indicum* L.

Frutex diffusus 1.5 m altus. Rami annotini dense ascendentē brunneo-strigosi. Folia vernalia membranacea oblonga apice acuta utrinque brunneo-strigosa, 2-4 cm longa 0.7-1.5 cm lata, foliis autumnalis persistentibus carnosis angustē oblongo-lanceolatis apice acutis mucronatis, 2-3 cm longis 0.7-1 cm latis, utrinque strigosis, pilis cinereo-brunneis. Pedicelli 1-1.5 cm longis dense subpatente brunneo-strigosi. Calyx 5-partitus, sepalis oblongo-ovatis acutis dense glanduloso-villosis, 5-7 mm longis 2.5 mm latis. Corolla late infundibuliformi-campanulata rutilo-purpurea intus in parte superiore maculis atro-purpureis notata, 5-6cm in diametro, lobis orbiculato-ovatis margine repandis. Stamina 5 corolla paulo breviora, filamentis infra medium albo-pilosis, antheris atro-purpureis. Ovarium dense brunneo-hirsutum, stylis glabris rubicundis.

Nom. Jap. Uren-tsutsuzi.

Hab. Prov. Aichi, Kitashidara-gun, Miwa-mura, Urengawa, cult. in Tokyo (Fusako Yamazaki, May 27, 1974, no. 974, Type in TI).

Rhododendron × Komatsui Yamazaki nom. nov.

R. kaempferi Planch. × *R. ripense* Makino

Rhododendron purpureum Komatsu in Bot. Mag. Tokyo 32: (16) (1918) (non G. Don 1834).

Rhododendron scabrum G. Don var. *Kaempferi* (Planch.) Nakai f. *purpureum* Nakai in Bot. Mag. Tokyo 33: 208 (1919).

Rhododendron Kaempferi Planch. var. *purpureum* Nakai, Trees & Shrubs Jap. ed. 1, 103, excl. f. 56 (1922); ed. 2, 136, excl. f. 137 (1927).

Rhododendron tectum Koidz. var. *purpureum* (Komatsu) Hara, Enum. Sperm. Jap. 1: 54 (1948).

Frutex. Rami annotini dense strigosi, pilis ascendentibus brunescensibus et pilis brevioribus glanduliferis albidis immixtis obsiti. Folia vernalia

membranacea elliptica apice acuta, utrinque brunescente-pilosa, 3-5 cm longa 1.5-2 cm lata, foliis autumnalis persistentibus carnosis oblongo-spathulatis apice obtusis mucronatis, utrinque brunescente-strigosis, 1.5-2 cm longis 0.5-0.7 cm latis. Pedicelli 0.7-1 cm longi ascendentē brunescente-pilosī. Calyx 5-partitus, sepalis lanceolatis vel oblongo-lanceolatis attenuatis dense pilosis, pilis brunescētibus saepe glanduliferis, 7-10 mm longis 2-2.5 mm latis. Corolla late infundibriformi-campanulata purpurea intus superiore maculis perpurpureis notata, 4-5 cm in diametro, lobis late ellipticis. Stamina 6-7 corolla paulo breviora, filamentis infra medium albo-pilosis, antheris luteis. Ovarium dense brunneo-hirsutum, stylis glabris rubicundulatis.

Nom. Jap. Sanyō-tsutsuzi.

Hab. Prov. Yamaguchi, Miya-gun, Ayaki-mura, Doigatake (T. Nakai, s.n., Type in TI). Shikoku, Prov. Ehime, Kamiukiana-gun, Kuma-machi (T. Yamawaki, May 20, 1970).

(東京大学理学部)

□山崎青樹：草木染 色と手法 80 files, 別冊 pp. 163 美術出版社(March 1974)。2,500部限定版 ¥ 23,000。まずすわう，あかね，コチニール，やなぎ，すすぎ，あわだぢそう，なら，えんじゅ，あかめがしわの基本染色，及びむらさき，べにばな，あい，インドあい，あい建の特殊な染め方を，多くの写真を使って説明し，草木染の染料と媒染剤では112の染料植物を，著者の手になる図で解説し，草木染染色史では染色，服色，染紙，威糸をへて現代までの色についての歴史を述べている。草木染八十色では絹，綿，毛の布に染めた実物を添えて，染の具体的経過を詳述し，色の名称についても論議している。著者父子二代にわたる約45年の年代がたっており，高崎にその研究所をうつしての研究と製作の結果であるから，信頼できると思うが，八十色の中には絹と木綿とで色名が同一で，色調の異なるものがあるのはいささか疑問が湧くところである。(前川文夫)

□日本植物園協会編，日本植物園要覧 pp. 179 同協会，東京 (Jul. 1975)。日本植物園協会が社団法人となって10年経った記念に出版したもので，昨年4月現在で園名，所在地，交通機関，総面積，設立年月日，設立の趣旨と沿革，特色と目標，施設，職員組織，年間予算，植物概数，主な植栽植物，催し物，入園時間と入園料，管理運営上の問題点，今後の計画，その他について記し，最後に平面図を掲げてある。会員の82園を網羅しているので，大きなところが二三脱けているのは残念だが，大体の様子がわかる。全体を，公開学校園，国，公立園，会社私立園，学生の教育並びに研究園(主に薬用植物園)に分け，北から南に排列してある。1964年に当時私が会長であった時に Botanical Gardens in Japan p. 84 を出したが，10年余りでその数が倍増したことをまことにめでたい。

(前川文夫)